

教職大学院Newsletter 93

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-09-22 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 福井大学大学院教育学研究科教職開発専攻教職大学院Ne wsletter編集委員会 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10098/10247

教職大学院

Newsletter No. 93

福井大学大学院 教育学研究科 教職開発専攻 since2008.4

2017.2.5

福井大学教職大学院と赤塚第二中学校の連携について

東京都板橋区立赤塚第二中学校 校長 宮澤 一則

1 赤塚第二中学校について

赤塚第二中学校は、埼玉県和光市と練馬区に隣接した板橋区の北部に位置しています。10年ほど前までは、生活指導上の課題が多い学校として有名でした。しかし、現在は生徒も落ち着いた生活を過ごしており、学力も区内で上位に位置するまでに成長しました。赤塚第二中学校が教科センター方式としてスタートしたのは4年前で、私が校長として赴任したのは3年前のことです。当時は、生徒も教職員も、この教科センター方式をどのように活用し、機能させるか、悩みながら模索していたようでした。その時には、まだ、中庭に紙飛行機が落ちていたり、廊下で大きな声を出す生徒がいたり、生活指導的に改善は見られていたものの、十分とはいえない状況でした。このような中、教科センター方式への移行を機に、赤塚第二中学校をよくしようと、教職員の気持ちは一つになっていきました。その中心となったのが、生活指導や学習指導ですが、福井大学教職大学院の拠点校として進めてきた校内研究組織の役割も極めて大きなものであると感じています。

2 福井大学教職大学院との連携について

赤塚第二中学校は、平成23年度から福井大学教職大学院の拠点校となり、この時からアクティブラーニング等について取り組み始めました。また、2名の教員が週末に福井大学まで通い、修士号を取得するとともに、授業力向上について学んできたことを校内研究や日常的な会話を通して教職員に紹介してきたことが、教職員の資質向上や意識高揚へとつながりました。毎月の校内研修の際には、福井大学教職大学院から木村先生や半原先生が来校して下さり、アドバイスを受けることができるので、教職員は進むべき方向を確認しながら、安心して授業改

善に取り組むことができます。そして、教員は工夫・改善した授業を実践する中で、生徒の反応を見て日常的に授業改善を繰り返しています。この理論と実践の融合が、スパイラルのように継続し、赤塚第二中学校をより高い次元へと引き上げてくれています。この結果、教員の意識は、教員にとってのよい授業ではなく、生徒にとってのよい授業を展開しようというものになりました。

また、年2回の福井大学教職大学院における福井ラウンドテーブルにも毎回本校の教職員が5・6名参加し、実践報告を行うとともに刺激を受けて帰ってきます。参加した教職員が、ラウンドテーブルの様子を校内研修で全教職員に広めることで、新たなアイデアが生まれ、教職員の自信につながりしています。

3 校内研究について

研究を進めるにあたっては、いくつかのキーワードがあります。アクティブラーニングに関しては、「協働」「探究」であり、生徒が自ら課題を見出し、自分で考え、グループでの話し合いから別の考えに気づき、全体に向けて発信するという流れを授業で

内容

- 巻頭言 (1)
- 冬期集中講座に参加して (2)
- インターンシップ/週間カンファレンス報告 (3)
- スクールリーダーだより (6)
- 東京ラウンドテーブルに参加して (7)
- 赤塚第二中学校ラウンドテーブルに参加して(10)
- 実践研究福井ラウンドテーブル 案内 (13)

展開しています。これにより、思考を整理する力や表現力が生徒に身に付き始めました。また、学期に1回ずつ公開授業を実施し、研究協議を行っていますが、協議会の型式は福井大学教職大学院でのラウンドテーブルを参考にしたものであり、教科や経験年数、所属学年、職種を超えて、様々な角度から生徒の学びについて議論を交わすようにしています。アクティブラーニングは、生徒たちの学びに関するものだけでなく、教職員にとっても有効なツールと考えています。また、毎週1回小グループの研究を週時間割の中に設定し、4人程の教職員がグループとなって、教科や学年を超えての話し合いを行っています。この取り組みは、互いに刺激を受け合うことから、若手教員及びベテラン教員の成長と学び続

ける姿勢につながっており、重要なOJTの場となっています。

赤塚第二中学校は、「生徒の主体的な学びを重視した授業の工夫改善」をテーマとし、研究を進めてきました。はじめは、教科センター方式やICTの導入と活用を通しながら、よりよい学校づくりに向けて取り組んできましたが、現在は「赤二型学力の創造」を探究テーマとし、「学力」とは何か、生徒たちにどのような力を身に付けさせることが必要なのか、校内研究組織全体を通して考えているところです。今後も福井大学教職員大学との連携を継続・強化しながら、赤塚第二中学校を発展させていきたいと考えています。

冬期集中講座に参加して

12月26日から28日、そして1月4日から7日まで、冬期集中講座が開講されました。1年目のまとめや長期実践報告の作成に向け、それぞれが自身の歩みを丁寧に辿り直す時間となりました。

スクールリーダー養成コース2年／嶺南教育事務所 藤本 純子

昨年3月、学位記伝達式に出席させていただき、晴れやかな顔で前に並ぶM2の先生方を尊敬の気持ちで見つめていたことを思い出す。そのときから、私は「長期実践研究報告書」を本当に完成させることができるのだろうかと不安でいっぱいだった。冬期集中サイクルは、苦しくも充実した時間だった。福井大学教職大学院に入学したばかりのまだ何も理解できていなかった自分から、こうして今長期実践研究報告書を完成させようとしている自分への変容を自分なりに感じ取ることができた。

この冬期集中サイクルで教職大学院の先生方にアドバイスをいただき、改めて気づいたことがある。それは、私はこれまでの教職生活において「相互性」や「互惠性」を大切にしてきたということである。教師が一方的に児童生徒に指導をするのではなく、教師も児童生徒から学んでいる。目の前にいる子供の一つ一つの言葉、しぐさ、行動を見取り、その存在に寄り添い、内なる声に耳を傾けることによって、自らの実践を振り返り、これから自分がどうすべきかを見出すことができると考えてきた。私は嶺南教育事務所研修課で、学校

現場の先生方に学びある研修を提供したいと考えてきた。この研修についても同じで、私たちが研修を提供するだけではない。学校現場の先生方が公開する授業を共に参観し、事前研究会、事後研究会に参加することで、私自身が先生方から学びを得ている。研修講座を受講する先生方と語り合うことで、私自身が気づくことがたくさんある。研修をつくる私達も、学校現場の先生方と語り合い、学び合つとともに成長する存在でありたい。だからこそ、学校現場の先生方とつながることが大切である。だからこそ、嶺南教育事務所内で課をこえて所員がつながることが大切であり、私は嶺南教育事務所「協働研究会(カンファレンス)」を大切にしてきたのだ。

実践し、それを振り返り、次の実践につなげていく中で、教職大学院のカンファレンスで実践を語り合うことによって新しい視点を得て、また自分自身の実践を振り返り、次の実践につなげていく。この学びのサイクルを繰り返してきたことで、今こうして自分自身の変容を感じ取ることができると思う。長期実践報告書を作成するにあたり、過去の記録と今の自分を行き来し、何度も自

分自身に問い直し、考えを整理してきたからだと言いうこともできる。教職大学院で学ぶ機会をいただいたこと、この教職大学院での多くの先生方、院生の皆様との出会いに心から感謝したい。

教師としても一人の人間としても、これからも「学び続ける」気持ちを失わず、今後も実践と省察を重ねていきたい。

インターンシップ／週間カンファレンス報告

相手に伝わるように話すには？

教職専門性開発コース1年／福井大学教育学部附属特別支援学校 廣田 久奈

福井にきて早1年が経とうとしている。言葉に慣れたと思ったら、次は雪に慣れるということに苦戦している今日この頃である。雪は街にこんなに積もるのか、長靴をはかないといけないとか驚きの連続であり、携帯電話で写真を撮って、親に送っている。写真1つで離れた親に雪が積もっているということが伝わるのが本当に便利な世の中だと感じる。

私は週3回、月火水曜日に、長期インターンシップ生として福井大学附属特別支援学校に行かせていただいている。毎朝いつも「ゆうゆうタイムどこ行くんや?」「昼休みは鬼ごっこ?かくれんぼ?」という一言から始まる。ゆうゆうタイムは衣食・工芸・環境と3つのグループに分かれて行われる活動である。「今日は〇〇。」と言うと「ええー。今日は〇〇(自分が入っているグループ)。」と言われてちょっとうれしい自分がある。ふと考えてみると入っている学部の良いところの1つに、教師と生徒との距離が近いことだと感じるがよくある。良い環境の中でインターンシップ生として入らせて頂けて感謝でいっぱいである。

一方で木曜カンファレンスでは、インターンシップであった出来事や悩みを話す時間がある。インターンシップでの出来事を話す際、いつも戸惑うのがどこまで話をすれば伝わるのかということだ。私たちの上の代には特別支援学校に行っている方がいない状態である。同期がいたことが幸いであった。最近になって「伝える」ことが大切だと感じる。しかし私には「伝える」力がまだまだである。いつもどのように話せば良いのか分からなくなってきて、思いを話すことができないのである。人に伝わるように話すためにはどうすれば良いのか。院生に「思い

をそのまま話せば良い。」と言われ、一からすべてを話す。すべてを話すと次は他の人が話すことができない。また簡潔に話そうと思うと根本的なところでつまづくのである。そのため本来話したいところが話せない。

インターンシップでも「伝える」ことが難しいと感じる。簡潔に分かりやすく伝えるためにするには、どうすれば良いのか考えることが増えた。現在、木工作品作りで、1人の生徒とペン立てを作っている。ペン立てを作るために、まずまっすぐ木に線を引いて、のこぎりで線の上を切る。そして切った木をそれぞれやすりできれいにして、高さなどをそろえて、組み立てていく。のこぎりで木を切る際にも伝え方に困り、つい生徒に「どうすれば切りやすいと思う?」と聞くことがある。最近では「分からない。」と返って来ることが多くなり、ちょっと考えてみてと返す。そして考えさせて物を使って説明している。「なぜこのように切るのか。」を伝える、そして実感することが大切と考え、最近では生徒にやるように促し、自分でも試している。しかしなかなか上手くいかない。

伝え方にも様々な種類がある。どのように伝えたら分かりやすく伝わるのかまだまだ試行錯誤中である。大学時代、小学部の重度のクラスに1年半ほど入っていた。その時、子供へ何か伝えるために絵カードを用いていた。絵カードには、様々子供の為の工夫がいっぱいだった。それで物事を伝えることができるのだと思っていた。今中学部に入らせていただき、言葉で伝えることの難しさを学んだ。これからも環境によって、「伝える」方法について考えていきたい。

「先生変わったね！！」

教職専門性開発コース1年／福井市至民中学校 竹内 瑞貴

「先生変わったね！！」生徒に最近よく言われる言葉である。至民中学校で、インターンシップを行って約10ヶ月経ち、私自身様々な葛藤があった。どのような葛藤があり、私自身どのような変容があったのか振り返っていききたい。

至民中学校は私の母校である。場所も移転し斬新な校舎に変身していた母校に、大学4年の時3週間教育実習にいった。その時インターンシップという制度を知り興味を持ち教職大学院に入学することにした。4月、前年度教育実習にいていたこともあり、私を覚えていた生徒は何人もいた。教育実習中は「先生」とは呼ばれず、「ちゃん」付けで呼ばれており、その名残で院生となっても4月、5月はそのまま「ちゃん」付けで呼ばれていた。敬語を使わず友達のように話しかけてくる生徒も何人もいた。教育実習中は、そのような立場でも問題なかったが、院生はどのような立ち位置で接すれば良いのだろうか？院生は教師とは違い、授業実践以外では教壇にたたず、学校にも毎日行くわけではないので、生徒から「先生」という認識をされにくい。院生である私も教育実習の時の立ち位置で居れば良いのか、より先生に近い立ち位置で居れば良いのか、どうあるべきかが分からなかった。年齢も若いということもあり教師と生徒との中間のような存在である状態だ。本当にこのまま中途半端な立ち位置でいいのかと悩んでいた。

そんな時、私とメンターの先生が2人でクラスの宿題と生活ノートのチェックを行う時間があつた。思い切って自分が悩んでいた院生の立ち位置について相談した。メンターの先生は、「将来先生になるのだから、なるべく『先生』に近い立場であるべき。完全に『先生』という立場にはなれないけれど、その努力をしよう。」とアドバイスをいただいた。その時に私は、「そうだ！！私は将来一人前の先生になるために教職大学院に入学しインターンシップを行っているのだ！中途半端な気持ちのままではいけない。少しずつでも良いから変えていこう。」と思

い、行動に移していった。それからは朝の会や帰りの会で担任業務をやらせていただいたり、生徒が敬語を使わず話しかけてきて、メンターの先生が注意をしてくれた時に、より「先生」としての立ち位置で生徒に接しられるようになっていった。自分のクラスでは先生という認識が強くなっていったが、異学年や他のクラスではまだまだ訪問者扱いであった。6月後半から、ホームクラス以外でも授業実践を行うようになって生徒の様子も変わっていった。生徒たちが「先生」と認識するための第一条件は教壇にたち、授業で教育をするということだと感じた。

9月に入った頃、またひとつの疑問が沸いてきた。今度は「生徒指導」についてである。メンターの先生に「もっとクラス入り込んでいってもいいよ！」と言われていたが、私の生徒の接し方、関わり方が本当にいいのか、自分では何が正しいか判断できず、指導が間違っていたらどうしようという不安でクラスに深く入り込めない自分がいた。放課後、メンターの先生と話し合える機会があり、自分が思っている疑問を聞いてみた。先生は「私が指導を行っているとき、本当に正解かわからないけど、自分を信じてやってきた。失敗したこともあるが、失敗したらそこから変えていけば良い。」とアドバイスをいただいた。この言葉を聞いてとても安心した。自分が思いきり生徒と関わっていないこと、不安で指導できないこと。その方がよっぽど問題である。それからは、少しずつではあるが自主的に変わっていく私がいた。そして今、生徒から「先生変わったね！」と言われるようになった。

自主的に行動して生徒と思いきり関わっている私がいる。悩みながら、将来の「先生」を目指して一歩ずつ歩めているのは、メンターの先生のおかげである。それは普段からコミュニケーションがしっかり取れているからだと思う。これからもさらにコミュニケーションを深めて、とって学級のため生徒のため、そして自分のために全力で取り組んでいきたい。

今日から、再び学び続けていくために

教職専門性開発コース2年／福井市中藤小学校 山田 芳裕

寒風吹く一月中旬。同期である M2 院生のキーボードを叩く音が、院生室に響き渡っている。一月末提出の長期実践報告書を執筆しているためである。私は小学校免許取得のため、後一年院生生活が残されている（三年履修）。よって今年度、報告書の執筆はない。そんな状況ではあるが、のん気なことは言っていられない。現在、非常に複雑な思いが、私の心の中で混ざり合っている。これまで、切磋琢磨し協働してきた M2 院生の姿を見ていると、何とも言えない寂しさや、頼もしさのようなものが押し寄せてくるのである。教職大学院の門を叩いてから今日まで、共に高め合ってきた院生が、「長期実践報告書完成」、いわゆる教職大学院での「集大成」の日を迎えようとしている。その姿は、寂しくもあり嬉しくもあるのである。この複雑な思いを言語化するには、私の語彙力が追い付いておらず、上手く表現できない。どうしても稚拙な文章になってしまうのだ。そのような反省の念を少し横に置き、ニュースレターの執筆を行っていきたい。

昨年の 12 月、「日本教職大学院フォーラム」に参加させて頂いた。これまで二年間に渡って行ってきた、長期インターンシップ、及び週間カンファレンス（ここでは実践省察カンファレンスと呼ぶ）について発表する機会を頂けたのだ。そこでは、入学してからお世話になっている中藤小学校でのインターンシップと、それを支える実践省察カンファレンスが、我々の学習の軸になっていることを発表した。我々院生は、インターン先で見受けられた子どもの姿から、学びや疑問を生み出している。それを日々のカンファレンスで議論し、深め合い、自らの学びにしている。また今年度は、M2 院生として、実践省察カンファレンスの組織・運営にも携わった。簡単に言うと、自らが受講する大学院の授業を、自分たちの手で大学院の先生方と、共に作りあげていくというものである。後期に行ったカンファレンスの内容を紹介しながら、実践を通して得た「本当の学び」を自らの心境と絡ませながら述べて行きたい。

今年度行った、後期の午後の活動としては、主に「公教育改革の課題に基づくプロジェクト学習（以下公教育）」、「授業改革・カリキュラムマネジメント実践事例研究（以下授業づくり）」の二つが挙げられる。「公教育」では、現行の学習指導要領の

検討や、文科省が出された「審議のまとめ」等を読み深め、公教育改革の方向性を探った。「授業づくり」では、過去の実践事例・先行実践を読み、「公教育」で深めた公教育改革の動向と絡めながら、各々が授業づくりを進めて行った。この学びは 10 月～12 月までを 3cycle として行い、12 月末の「最終カンファレンス」では、「公教育」と「授業づくり」で行った学びのまとめとして、自分なりのカリキュラムデザインを意識した、単元構想を作成した。

毎週、カンファレンスが終了次第、今後の進め方を決める会議が執り行われる（通称 M2 会議）。この場では、M1 院生の進捗状況の確認、生まれた疑問等の共有を行い、よりよいカンファレンスになるよう議論を交わしている。当初は、柳沢先生を始めとする先生方が方向性を示してくださっていた。しかし時期が経つにつれ、我々院生が中心となり会議を進めていくこととなった。院生それぞれが意見を持ち、自らの学びや、M1 院生の学びの場を保障したい思いが、そこにはある。そのため、話し合いは熱を持ち、激論を交わす日も少なくない。しかしその姿は、院生自らが課題意識をはっきりと持ち、カンファレンスに取り組んでいる証拠であるとも言える。与えられたカリキュラムに乗っ取って過ごしているだけならば、上のような状況になることはないだろう。院生自らが今後のカリキュラムをデザインしている、「自ら学ぶ」姿勢があるからこそ、使命感を持ち、話し合いに参画しているのだと考える。その様子こそ、これから求められる「学び」なのではないだろうか。話し合い、議論し、ベストではなくとも、その状況で最善の方法を探る姿勢は、これらを担う子ども達を育成する上で、重要な視点であると考え。上記より、我々はインターン先での子どもとの関わりや、カンファレンスで議論する「学習者」であり、企画・運営し、カリキュラムをデザインする「運営者」でもあることに気付いた。同期の M2 院生と協働し、これまで共に学んできたからこそ、この福井大学教職大学院の「本当の学び」に、少しばかり触ることが出来たと実感している。

この内容を手に取って読む時は、長期実践報告会であろうか。共に学び続けた M2 院生の「集大成」の日である。まだまだこのメンバーで学び続けて行きたい思いは正直ある。同期との別れは本当に惜し

い。しかし、私には後一年、残された時間がある。ここで学びが止まってしまえば、三月に修了していく同期に笑われてしまうだろう。そのため、共に三年目を迎える院生と、来年度から中心になっていく M1 院生。そして来年度入学してくる新しいメン

バーと共に、更なる高みへ突き進む。そして来年の今頃には、「大学院生活で、最高の学びが出来た」と胸を張って、報告会に臨み、新たな一歩を踏み出したい。

スクールリーダーだより

スクールリーダー養成コース 2 年 / 坂井市高椋小学校 名倉 康浩

小学校に赴任して 15 年が過ぎようとしている。

15 年前に初めて担任をした子を思い出してみる。今、目の前にいる子どもたちとは違う。一言でどこが違うかを表すのは難しいが、環境や時代の変化に伴い、子どもたちの特性や強いられる学習にも間違いなく変化が感じられる。

15 年前の私が、そのまま今の学級を担当したなら、完全に崩壊しているだろう。近年、発達障害を抱える子どもの割合が増え、学級経営上の指導支援に工夫がいる。つまり、環境や時代の変化に伴い、私たち教師のなすべき支援も変化しているのである。私たち教師も学び、変化・向上していかなければならないのである。

子どもたちには、学び合いを通して学力向上や人間性の育成を図る。同様に、教師も学び合いながらスキルアップに努める必要がある。それが、本校の校内研修のテーマである。

本校は、1 学年 3 クラスずつの 18 クラスと特別支援学級 1 クラスの計 19 クラスである。

教師の学びの場としては、年 2 回の指導主事訪問と、定期的実施する校内研修、丸岡中学校区指定の『魅力ある学校づくり調査研究事業』への取り組みが挙げられる。今年度、私は研究主任という立場で、研修会の計画実施にあたっている。

どの研修会においても共通して取り入れているのは、小グループでの話し合いである。教職大学院で学ぶようになってから、グループ討議の良さを実感し続けている。聞いてもらえる安心感や他の人の話を聞いて何かを得られる満足感。何より自分自身の思考が整理される充実感が大きい。これまでの自分の経験を振り返り思考を整理することで、新たな

方向性や自分の実践への意義付けができる。そうやって理論の構築がなされるという。

そのグループ討議の形をそっくりそのまま真似るように取り入れた。グループの人数や机の配置、時間の設定など。グループ討議を行うことで、全員がある程度の発言をすることが保証されるようになった。全員での会議や話し合いでは、一部の人の発言で会が進行することが多いが、グループ討議ではそうではない。発言が増えるということは話しやすいということである。参加者の中から「もっと時間が欲しい」という声が出たのは、その表れだと考えられる。授業研究会においても、その形を取り入れている。授業を参観する際の視点を示した上で、グループ討議を行う。どのグループも話が途切れることはなく、次から次へと意見や感想、課題等を述べ合っている。

校内での研修の場においても、全員が発言しながら話し合いが進行しているので、一人一人が自己の振り返りを行い思考の再構成がなされていることになると思う。話し合う中で感じたことや得られたことが、その後の実践へとつながっていく。これは教師の学びであり、話し合いの中で学ぶ姿は学び合いと言えよう。

授業研究会は、授業についての話し合いであり、視点も明確にしている。一方、計画している校内研修は、答えや結論を求めるものではなく、幅広いテーマのもとに話すこと、聞くことを重視している。例えば、「一学期を振り返って」「若手教師の不安や悩み」「研究テーマについて思うこと」……。

漠然としたテーマであることは、話しやすさにつながったようである。しかし、学校全体として前に進むためには、同じベクトルで学びを深めていくこ

とが大事である。参加者が何に向かって進んでいるのか、何を重視して研究に取り組んでいるのかを認識できるようにしていかなければならない。そこで、研究テーマである「学び合う子の育成」に重点を置いて、定期的に自分の実践を振り返りその後の課題を明確にする機会（研修会）を設定している。

7月、10月、11月に、各自の振り返りと次への課題を記録に残しながら継続している。校内のこ

となので、話し合う中で、子どもの様子をイメージしやすい。日々の実践の振り返りなので、その後の実践につなげやすいものである。少しずつ参加者自身の中にも学びの感覚や学び合いのイメージが沸いてきたのではないかと考えている。

今後も、振り返りをもとにした話し合いの場を継続し、日々の実践の充実を図ることで、学校全体のレベルアップを求めていきたい。

究集会・公開研究会などの報告

東京ラウンドテーブルに参加して

2016年12月10、11日明治大学において実践研究東京ラウンドテーブルが開催されました。1日目はコミュニティのコーディネーターの力量形成にかかわる各地の取り組みが報告されました。2日目は社会教育や地域活動に携わっている方、学校教育関係者が参加するラウンドテーブルが行われました。

二つの時間

福井大学教職大学院 准教授 荒木 良子

昨年12月に2日間の日程で東京ラウンドテーブルに参加する機会を得ました。久しぶりの東京行きで、宿泊ホテル探しから大騒ぎしましたが、迷子になることもなく無事に帰ってくることができました。

一聴衆として聴く

参加者は社会教育関係の方が多く、会場はぎゅっと詰まった熱気と親しみのある空気に満たされて居心地のよい空間でした。1日目は午後からスタート。シンポジウムがありました。3人のシンポジストの中で強く印象に残ったのは本学の柳澤先生のお話でした。

柳澤先生のお話はこれまでも折に触れ、見聞きしているような内容なのですが、じっくりとまとまって聞く機会はなかったと気づきました。今年度から教職大学院で仕事をするようになったわたしは、柳澤先生が話されるのを何度も何度も聞いてきたつもりでしたのに、ほんとうに何にもわかっていないんだなあ、こういう機会に恵まれてよかったとしみじみと思うのでした。

わたしは柳澤先生のお話を十分に理解できているとは言えませんが、じっくりとまとまって聴くことで、話は断片的ではなくなりストーリー化されて、言葉がわたしなりに意味づけられて、すんと、あるいはふんわりと、あるいはうろうろと迷いつつ、自分の中に落ちていきます。一人の聴衆として椅子に座って前を見て、ひな壇の上で（今回はひな壇はありませんが）語る人の話をじいっと聴くという場面であったために、途中で誰かと語り合う必要もなく自分のペースで、自分と対話しながら話をかみしめることができます。幸せな時間でした。そうやってお話をかみしめていると、時々、柳澤先生のお話が先に進んでしまい、慌てて追いかけるということもありますが。

ファシリテーターとして聴く

2日目はグループセッションです。構成メンバーは大学生1名、現職教員1名、NPOの活動をされている方1名、社会教育関係1名、そして、わたしの5名です。報告は2本で、一つは大学生による「登戸探求プロジェクト」という小学生を対象とした自

然を相手にした探求活動の取組で、ポスター発表と併せて学生さんたちが指導の先生の温かな見守りの中、常に新たなに活動を作り直していく過程が伝わってくるものでした。二つ目は本教職大学院の修了生でもある中村先生の中学校での実践です。教職大学院当時の至民中学校でのインターンシップの体験から話が始まり、教師としての希求し続けることに語って下さいました。

聴き手側のお二人のうち、お一人は杉並冒険遊びの会という主に幼児さんを対象に公園を利用した遊び場の作りを15年間続けておられる方で、ご報告こそありませんでしたが、豊富な経験が話題の中にちりばめられて、2つの報告を通して3つのお話をお聴きすることができたようなお徳感！がありました。偶然にも幼児、小学生、中学生と対象になる子どもたちの年齢が幅広く、子どもの育ちを通して考えることもできました。学生、現職教員、NPOの方と立場も年齢も異なる人たちが、異なる年代の子どもたちの話を出し合い、それが一つの物語につながっていくという楽しい経験をすることができました。

また、聴き手側のお二人のうち、もう一人の方は活動されている生涯学習カレッジでこのラウンドテーブルを紹介されてのご参加でした。今日は聴くことに徹したいと言われて、何度か発言を求めましたが、ご自身のお考えを述べることは控えておられました。しかし、最後に、「〇〇さんのお考えに自分は賛同する」と発言されて、ご自身の考えも合わせて述べておられました。最初はどの話題も自分の関心事とはジャンルの違うお話だと思われたようでしたが、ワイワイと言葉が飛び交う中で聴き手に徹するうちに、自分の中に話題がすっと落ちたのかなと思いました。

楽しいグループセッションでしたが、ファシリテーターとしては頭の中が常にフル回転状態で、終わってみたいくらいおりました。3人の方、それぞれのお話が魅力的で、興味深く、尋ねたいことが次々と湧き上がってきました。3人の話がつながっていくことが見えてくると、ますますワクワクしていきました。つまり、メンバーに恵まれたということなのですが、話し手と、自分と、それから他の聴き手の方と次々と対話の連鎖が自分の中で起きている。それはそれで、頭の中は活性化し、忙しくなり、最後は疲れるんだと帰りの新幹線でしみじみ思っておりました。こんなファシリテーションでは参加者も振り回されていたのではないかと反省もしました。

聴くこと

わたしは大学に勤める前は教育相談として地域の幼稚園、保育園、小学校を巡回し、子どもさんたちの様子を見せていただき、先生方や保護者の方とお話をするということが毎日の仕事でした。生まれつきのおしゃべりで（生まれた時から泣き方が半端なくうるさかったらしいです）、人の話を聴くのは苦手ですが、仕事柄、自分は聴くことが苦手だということを自覚して努力してきました。

今回の東京ラウンドテーブルでは、一日目のただ座って聴くことに徹する時間と、二日目のファシリテーターとして参加したグループセッションの二つの時間で、二つの「聴く」を経験しました。一聴衆として聴く時にはわたしは、話をされている方の言葉を通して自分と対話していることを感じました。静かな時間です。ファシリテーターとして聴く時には次々といろんな相手との対話が連鎖し、目まぐるしく忙しい時間です。相談の時の「聴く」はどうなんだろうと、帰りの新幹線の中でうとうとしながら、ぼんやりと考えて東京への出張は終了いたしました。

話すこと、聞くこと

教職専門性開発コース1年/福井大学教育学部附属小学校 福岡 友輝

東京ラウンドテーブルは、福井ラウンドテーブルとは異なり、現職の先生があまり参加するラウンドではなく、社会教育に関わる人々の集まるものだと聞かされた。その時の正直な感想は、何を話しているのかわからないということだけである。そもそも、福井大学教職大学院というものが、どのような

ものであるのか、そこで何を学んでいるのかなどから話を進めていく必要があり、どこまで専門的な話ができるのだろうかと考えていた。

2日目の報告では、ざっくりとした教職大学院の説明をしたため、持ち時間の7割が余ってしまった。

どこまで深く話していいのかが自分の中で曖昧であったため、このくらいの説明でいいかと思ひ質疑応答の時間にまわすと、意外にも教職大学院についての質問から、私の生い立ちの話まで様々な質問が返ってきた。

特に私の中で印象的だったのが、授業実践の話である。先日行った授業の話の後に、「あなたの目指す授業ってどんなものなの？」と質問された。私の目指す授業は“子どもたちが必然性を感じる授業”であり、そのための課題設定（問いの立て方）をインターンの中で考えていると答えた。すると、「自分が今まで目にした実践で一番学びの必然性が生まれて、ストーリーを感じたものはなんだったのか？」と返ってきた。これまでの記憶を思い返すと、夏の集中講座で読んだ伊那小学校の“お店やさん”の実践が子どもたちの学びの必然性を生み出しているものだと感じていたので、それを紹介した。「あー、なるほどね。そんな実践があったんだ。」という反応を予想していたが、「自分の課題とどうつながっていると感じているの？」という言葉が返ってきた。予想もしていなかったことに加えて、それは自分が考えていないものだった。しかし、よく考えてみると、夏の集中講座以来、伊那小の実践記録を手にとったこともなければ、自分のレポートを見返したこともなかった。夏の集中のレポートの内容を紹介しているうちに、自分が当時、伊那小の実践から子どもの学びの意欲を生み出す教師の姿について注目し、何が大切かを考えていたのかを改めて感じる事が

できた。他者からの視点を通じて、自分の授業実践の振り返りを行う際に、さらに前に戻って関連性を探してみることも大事だと気づかせてもらうことができた。

また、子どもの学びの必然性には、子どものやりたい、学びたいという思いを大事にする姿勢が欠かせないとのことから、聞き手の方々の専門である、社会教育の“生涯学習”とつながるものがあるのではないかと考えた。大人になっても自分から学んでいこうとする意欲は生まれる。そんな大人になってからの学び続ける“生涯学習”の基礎となっているのが、今日の前にしている子どもたちの“学びへの意欲”なのではないかという視点を得ることができた。小学校1年生のクラスでインターンを行う私にとって、もちろん幼小のつながりを考えることは大事であるが、学びの大人へのつながりも意識して考えていくことが大事であると感じた。

ただ自分のことを話ただけであったが、そこには聞き手の中の考えや興味と私の話す内容が、一致したものが存在し、聞き手にとっても意味のあるものになっているのだと感じた。1日目の柳澤先生の話でもあったが、“異質の中の同質”を考えることが今回の東京ラウンドテーブルでの成果であったと感じる。普段の木曜カンファレンスや合同カンファレンスでは、同じ環境の人同士で話し合うことが多いため、今回のような機会を踏まえ、自分と他者の学びとがどのようにつながるのかをさらに発見していきたい。



研究集会・公開研究会などの報告

赤塚第二中学校ラウンドテーブルに参加して

2017年1月17日、板橋区立赤塚第二中学校においてラウンドテーブルが開催されました。毎年校内研修の一環として取り組まれているものです。福井からは教職大学院の院生・スタッフ総勢8名が参加しました。

赤塚第二中学校ラウンドテーブルに参加して

教職専門性開発コース1年/福井大学教育学部附属中学校 小形 光輝

東武東上線成増駅から徒歩5分、閑静な住宅地の中に赤塚第二中学校はあった。赤塚第二中学校は教科センター方式を4年前から採用しており、教科の専門性の向上とそれによる主体的な学びを追求している。各教科には生徒会組織である「教科リーダー」が設定され、生徒主体で掲示物の充実や、学習環境の整備を行っている。また、その中で「3年生教科リーダーから1、2年生に向けてのメッセージ」といった掲示もあり、縦の繋がりの強さも感じた。

午前中は校舎内を見学させていただき、その充実した学校環境に大変感動した。また、この日の給食は地域の農家の方から提供していただいた大根を使ったメニューであり、都会の学校のイメージにはなかった地域とのつながりを感じた。

今回私は国語科の実践を参観させていただいた。授業者の森田教諭はICT推進担当であったため、授業の中でどのようにICTを活用しているかに注目して授業を見させていただいた。授業は「根拠を基にして自分の想いを言語化する」ことをねらいとした授業で、美術作品や赤二中から望む富士の写真などを構図、色彩、作品名などから特徴を言語化する。授業に使われる作品はすべてタブレットで鑑賞し、それにテキストボックスを付け加えていく。授業者の持つタブレットと教室正面のスクリーンに全員の画面が映し出され、生徒の活動の進捗などが一目でわかるようになっていた。個人で活動をしている時、『神奈川沖浪裏』を見ている生徒が「波が大きい」

など根拠に即していない事実を挙げていた。しかし、その後のグループ共有の時間に他のグループメンバーから「何とくらべて大きいと感じた？」という問いから「富士山を小さく描くことで波の大きさを表現している」という構図についての説明を行うことができていた。グループでの対話が生徒をより深い学びにつなげた瞬間だと感じた。全体会で木村先生は「“主体的な学び”とは語ることと書くことだ」と語っていた。タブレットなどを用いた個人作業は対話が少なくなり、浅い学びに終わってしまう危険性がある。その中でグループ活動をうまく活用し、より生徒が学びに向かうことのできる学びの場を作っていたように感じた。

赤塚第二中学校の生徒たちは大変いきいきとしており、挨拶を欠かさない礼儀正しい姿がとても印象的だった。私はこの恵まれた学習環境の中で生活することのできる生徒たちをととても羨ましく感じた。また、ひとりひとりが実践を文章で残すなど教員も一丸となってこの学習環境をより充実させる授業研究を行っており、研究テーマとして掲げる「赤二型学力」のレベルの高さを感じた。

私はこの一日で赤塚第二中学校から大変多くのことを学ぶことができた。また、来年度も参加し、より洗練された「赤二型学力」から自分の実践を充実させたいと感じたラウンドテーブルであった。

板橋区立赤塚第二中学校 ラウンドテーブルを終えて

教職専門性開発コース1年／福井大学教育学部附属中学校 田中 亮

今回赤塚第二中学校にラウンドテーブルに行かせていただき、まず驚かされたのは、校舎全体がきれいで、生徒の作成物やこれまでの学習の経過がわかるもので満たされていたことである。見学していて特におもしろいと思ったものは、英語委員会が作成したおみくじである。おみくじには大吉、中吉といった結果が英語で書かれており、中身には「恋」、「勉強」という欄がありその内容も英語で書かれている。私の引いたおみくじの「勉強」の欄には「補修になるでしょう」と書かれていた。

また教室の扉の外側が一面ホワイトボードになっており、生徒または教員が、明日の連絡や宿題、などさまざまなことを書き込み活用している姿が見られた。各教科のスペースには、直近のその教科に関連するニュース、生徒が授業で学習した内容をより深く、専門的にまなぶことができるような資料や本が置かれていた。

私は、赤塚第二中学校には、生徒が自分のやりたいことを実現するための「自分を表現できる環境」が整っているように感じた。自分がやってみたいことを表現し仲間と協力しながらいろいろなものを作り上げていく場がここにはあると思う。赤塚第二中学校の生徒をみていて学校に来るのが毎日楽しくて学校に来ているんだということがひしひしと伝わってきた。生徒の中に学校生活での規律はありながらも、見ていてすごくあたたかい気持ちになれるような生徒の「自由」の姿を見ることができた。

授業実践の見学では、英語科の杉山教諭の授業を見学させていただいた。授業内容は、人称代名詞の目的格を使って自分が好きなキャラクターや芸能人を友達は好きか嫌いかを聞いていくゲームを行っていた。生徒の様子を見てみると、なるべく多くの生徒に自分が好きなキャラクター、俳優を紹介しようと話す相手を探すために教室を歩き回っていた。

このゲームを行う生徒を見て、自分の好きなものを英語で話すことがまず生徒の興味を引き立たせており、隣の席の生徒だけではなく、多くのクラスメイトと自分が興味をもったことでの会話を数多くすることで、会話の中で人称代名詞が自然とでてくるようになっていたように感じた。ある一人の生徒は15人の生徒と会話をしていたが、1人目の時と比べものにならないくらい最後には自信を持ってすらすらと自分が好きなものを発表していた。私は英語を話すことは実技教科と近いところがあると感じている。いかにその動作を「自然」に行うことができるようになるか、そしてその動作を自分の言葉で説明できるかというところである。今回の授業を見学させていただき、「自然に身につける」ための授業の構想から多くのことを学ばせていただいた。

このラウンドテーブルを振り返り、生徒が表現活動を活発に行える環境、そして教師の授業に対する熱意、これこそが生徒の心を動かし自ら主体的に学ぼうとするきっかけになっているのではないかと感じた。

赤塚第二中学校ラウンドテーブル

教職専門性開発コース1年／福井市至民中学校 竹内 瑞貴

「すごい！綺麗！学校じゃないみたい！」私が赤塚第二中学校の校舎に入った最初の感想である。私がインターンを行っている至民中学校も初めて訪れた際には同様の感情を覚えたが、今回もそれに匹敵する感動であった。とても長い一直線の廊下、吹き抜けになっているエリア、高台を利用して地下と一階が入り組んでいる校舎、まるでカフェに居るような錯覚を覚えさせるような図書室。こんな素晴らしい赤塚第二中学校に行くのは、このラウンドテーブル

で二回目であり、前回は合同カンファレンスの時である。こんな綺麗な学校ではどんな授業をしているのだろうか？生徒はどんな表情して授業を受けているのだろうか？どのような学校生活を送っているのだろうか？一回授業を参観してみたいと思った。また、私が赤塚第二中学校に行きたかった大きな理由は実はもう一つある。それは、至民中学校と同じ教科センター方式を取り入れているからである。赤塚第二中

学校はそれをどのように工夫して活かしているのか。至民中とはどこが違うのか興味を持ったからだ。

赤塚第二中学校には教科のエリアというものがある。最近の新聞記事や生徒が作成した新聞やポスター、俳句や書初め、教科によって様々なものが掲示してあった。これは生徒たちが掲示しているものである。今回は英語エリアの英語おみくじを紹介したい。英語おみくじはその名の通り英語のおみくじであるが、内容も全て英語で書かれていてとても面白い。私が校舎見学を行った二時間目にはすでに、半分くらいおみくじが引いてある状態でいかに生徒たちが積極的に楽しんで取り組んでいるのかが感じられた。このように、各エリアでそれぞれ工夫を凝らしている。生徒が「学校に行きたい！学校が楽しい！」と思う工夫がされていた。このようなエリアを最大限に活かせるのが教科センター方式だ。至民中学校もエリア毎に様々な掲示を行っているが、赤塚第二中学校を参考にできるところはまだ多くある。

学校を回らせていただき、それぞれ5分程度ではあるがいくつかの授業を参観させていただいた。授

業を参観して、とても不思議な光景を目にした。先生方が常に職員室から連絡が入るトランシーバーのようなものを身に付けていたのである。これは数年前に学校が荒れていた時の名残である。以前はいつでも駆けつけられるように付けていたそうだ。現在では学校が荒れていたとは思えないくらい、生徒は落ち着いていて、さらにとっても気持ちの良い挨拶をし、表情も生き活きとしていた。また授業ではICTを活用し生徒同士での調べ学習や、グループ活動を中心に授業を展開していた。ラウンドテーブルでのセッションでは、教科センター方式は上手くいかなかった時の話や、その後教科センター方式が機能し学校全体がよくなっていった様子を聞くことが出来た。

ラウンドテーブルや学校見学、授業参観を通して至民中学校と似ている点が多くあると感じた。赤塚第二中学校の目指すべきところ「赤二型学力」をこれから作り上げていくなかで、私自身多くのことを学べるであろう。



実践し 省察する コミュニティ

Round Tables:
Spring Sessions 2017
for Reflective Practice
and Organizational Learning
in University of Fukui

For Communities of Practice and Reflection, since 2001

実践研究 福井ラウンドテーブル

2017 spring sessions

2/17(fri) 17:30-18:40

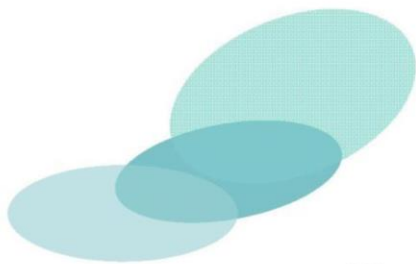
2/18(sat) 9:30-17:40

2/19(sun) 8:20-14:00

福井大学総合研究棟V (教育系1号館)
総合研究棟
アカデミー・ホール

探究する学びを実現する教師
教師を支える教職大学院
教師の実践力を培う学校拠点の実践研究

学校と大学/
実践と研究を結ぶ
新しい実践研究組織とそのネットワーク



2017.2.17-19

教師教育改革コラボレーション/福井大学教職大学院

大学院教育学研究科教職開発専攻

共催 福井大学高等教育推進センター・教育実践研究フォーラム・社会教育実践研究フォーラム

実践研究 福井ラウンドテーブル 2017 spring sessions

2/17(fri)

Pre-session 17:30-18:40
教職大学院におけるプロセスコンサルテーション

2/18(sat) 9:30-17:40

9:30-10:50
社会に開かれたイノバティブな中等教育の挑戦
11:00-12:20

Students' Poster Session
保幼小教育フォーラム「子どもの世界を広げ、つなぐために」

orientation 13:00-13:10 学校・教育・地域を考える4つのアプローチ

- A 学校:子どもたちのコミュニティを支える教師のコミュニティー支え合うコミュニティに向けて
- B 教師 ①21世紀の教師教育をイノベーションする
学管理職養成の今日的課題を考える/教職大学院の可能性と課題
②これからの学部段階の教員養成を考える :実践を聴き、夢を語る a:教員 b:学部学生
- C コミュニティ:学び合うコミュニティを培う 何がコミュニティの持続的発展を支えているのか
- D 授業研究:子どもと教師の学びを支えるために授業研究をいかに組織するか

session I 13:10-14:10 実践に学び合う広場 実践の広がりに出会う **knowledge fair**

session II 14:20-15:50 課題の提起 方向性を探る **symposiums**

session III 16:00-17:40 テーマ別話し合い 問いを深める **forums**

特別セッション B①教師(国際)

学び合う教師のコミュニティが

世界の子どもたちの21世紀の学習を支える

「日本型教育の海外展開」福井キックオフ ミーティング

13:30 開会挨拶

13:45 「福井型教育の日本から世界への展開」

- (調整中) 前川 喜平 (文部科学省事務次官)
小林 栄三 (伊藤忠商事株式会社会長)
鈴木 規子 (JICA 独立行政法人国際協力機構理事)
淵本 幸嗣 (福井県教育庁企画幹)
柳沢 昌一 (福井大学教職大学院専攻長)

15:45 国際教育実践クロスセッション

by FK 20161215

Zone A 学校

「子どもたちのコミュニティを支える教師のコミュニティ」

——支え合うコミュニティに向けて——

これまで Zone A では、「子どもたちのコミュニティを支える教師のコミュニティ」というテーマのもと、協働の在り方について議論を積み重ね、その重要性を様々な角度から確認してきました。大きく変動する 21 世紀の社会を生きる子どもたちを支えるためには、教師一人の力では限界があります。だからこそ教師同士の協働性をいかに作り出せるか、それがこれからの学校に必要な問いではないかと私たちは考えたからです。

こうした問題意識は、平成 27 年に中央教育審議会の答申で提起された「チームとしての学校」という方向性に端的に表れているように、今や学校に関わる人々の間で周知のものとなっているように思います。この答申では、「チームとしての学校」を実現するために、専門性に基づく連携、学校のマネジメント機能の強化、教職員が力を発揮できるための環境整備の 3 つの視点が重要だとしています。確かにこうした視点の重要性は明らかです。しかし、「チームとしての学校」を実現するために最も欠かすことができないのは、教職員一人一人が同僚をはじめとする他者といかに支え合うか、その具体的な在り方そのものにあるのではないのでしょうか。連携がいかにスムーズに進んでも、マネジメントがいかに精緻になされても、環境がいかに整えられても、そこにチームは実現しません。日々の何気ない日常の中で、学校に関わるスタッフがともに語り合い、励まし合い、問題を考え、解決を見出していく、そうしたお互いを「支え合う」活動が、教師のコミュニティをチームたらしめているはずで

そこで今回の Zone A では「支え合うコミュニティに向けて」というサブテーマを設けました。幼児教育からは世代を超えて学び合い育ち合う保育士さんたちの実践を、小学校からは自主的な実践の学び合いの意義を、特別支援教育からは実践知の継承の取組を、と言うように異校種、異年齢、様々な立場の先生方からの話題提供を受けて、参会者が支え合うコミュニティについて、捉え直すことができたらと願っています。さらに立場を超えた参会者同士が、教師や保育士のコミュニティを支え合う実践について語り合い、その可能性を見いだしていくことができればと思っています。

Orientation 13:00-13:10

Session I ポスターセッション 13:10-14:10

Session II シンポジウム 14:20-15:50

〈シンポジスト〉 高浜町保育所研究グループ ぴっか

坂井市立春江小学校 教諭 山田俊行 氏

福井県立ろう学校 校長 小八木隆 氏

〈コーディネーター〉福井大学教育学研究科 荒木良子

Session III フォーラム 16:00-17:40

Zone B 教師

「21世紀の教師教育をイノベーションする」

BO 福井型教育の日本から世界への展開（仮）

日本の公教育システムの中でも、特に優秀な成績を収めている福井の教育システムを世界発信することにより、教育を通じた諸外国との強固な信頼・協力関係の構築、日本の教育機関の国際化の促進、日本の教育産業等の海外進出促進を目指します。

- ・日時 平成 29 年 2 月 18 日土曜日 12 時 00 分開始
- ・会場 福井大学アカデミーホール
- ・プログラム概要
 - 12 時 00 分 ポスターセッション「アフリカ授業研究による教育の質的向上」
Ethiopia, Nigeria, Malawi, Rwanda, Uganda 等
 - 13 時 30 分 開会挨拶
 - 13 時 45 分 「福井型教育の日本から世界への展開」キックオフフォーラム
 - 三木 忠一様 (文部科学省大臣官房国際課国際戦略企画室長)
 - 小林 栄三様 (伊藤忠商事株式会社社長)
 - 鈴木 規子様 (JICA 独立行政法人国際協力機構理事)
 - 淵本 幸嗣様 (福井県教育庁企画幹)
 - 柳沢 昌一 (福井大学教職大学院専攻長)
 - 15 時 30 分 休憩
 - 15 時 45 分 クロスセッション (アフリカ関係国の参加者を交えた討議)
 - 17 時 30 分 閉会挨拶

B1 管理職養成の今日的な意義を考える ―教職大学院の可能性と課題―

Zone B では、生涯にわたる教師の職能成長を支える教師教育という視点から、“21世紀の教師教育をイノベーションする”をテーマとしています。

次期学習指導要領においては、「社会に開かれた教育課程」の理念のもと、カリキュラム・マネジメントの確立やアクティブ・ラーニングの視点からの学びの実現などが改訂の基本方針とされています。それに先立ち、中央教育審議会は、平成27年12月に、教員の資質・能力の向上を目指す制度改革、「チームとしての学校」の実現、地域と学校の連携・協働に向けた改革を柱とする三つの答申を示しました。

このような動向の背景には、社会の急速な変化に伴い、学校教育において求められる人材像が変化していることや、学校現場が抱える課題が複雑化・多様化していることがあげられます。

こうした中、これからの教員は、新たな学びを展開できる指導力を修得するとともに、複雑かつ多様な課題に、幅広い視野に立って柔軟に対応できる指導力、同僚と協働して、組織として困難な課題に対応できるマネジメント力、地域との連携等を円滑に行うためのコミュニケーション力などを身に付ける必要があります。

中教審の答申「これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について」(H27.12.)では、教職大学院において、管理職候補者となる教員に対する学校マネジメントに係る学修の充実を図り、管理職コースを設置することや、教育委員会との連携による管理職研修を開発・実施することの必要性が謳われています。

このことを踏まえ、福井大学教職大学院では「学校改革マネジメントコース」を平成28年4月から新たにスタートさせました。兵庫教育大学でも「学校経営コース」に加え「教育政策リーダーコース」を、大阪教育大学は「学校改革マネジメントコース」(H27.4~)をそれぞれスタートさせ、岐阜大学では平成29年度から「学校管理職養成コース」が設置される予定です。

そこで、今回の Zone B1 では、関係のシンポジスト5名で、管理職養成の今日的な意義や教職大学院の役割などについて、マネジメントリーダーの資質・能力、カリキュラム・マネジメントや「チーム学校」を実現できるような教職大学院のカリキュラムの在り方なども交えながら論議していただくとともに、引き続いて行われるフォーラムでは、少人数のグループで参会者の皆様方と共に論議していきたいと思っております。

Orientation 13:00-13:10

Session I 13:10-14:10 ポスターセッション

Session II 14:20-15:50 シンポジウム

〈シンポジスト〉兵庫教育大学教職大学院教授 日渡 円 氏

大阪教育大学連合教職大学院教授 大脇 康弘 氏

岐阜大学教職大学院教授 篠原 清昭 氏

文部科学省初等中等教育局

教職員課課長補佐 大江 耕太郎 氏

福井大学教職大学院教授 三田村 彰

〈コーディネーター〉福井大学教職大学院教授 松木 健一

Session III 16:00-17:40 フォーラム

Session I, II を受け、小グループに分かれて参会者の皆様方と議論を進めます。

B2 (a) これからの学部段階の教員養成を考える 実践を聴き、夢を語る

教員養成をめぐる制度の見直しへの提起が重ねられ、とりわけ教職免許法の改正にともなうカリキュラムの変更が求められてきています。しかし、長い蓄積の中で培われてきた組織の中で、新しい課題への取り組みを進めていくには大きな困難がともないます。それぞれの実践と経験を活かした、当事者としての知恵が問われてきていると思います。

昨年6月のラウンド・テーブルで、学部の教員養成に携わる当事者が、互いの取り組みを聴き合い、語り合う新しいセッションが初めて開催されました。二回目になる今回は、新たに学生中心のセッションが生まれていますが、並行して前回同様教員が自分たち自身の取り組みを語るセッションを進めたいと思います。大学における教員養成をどのように支え、また今後に向けて発展させていくのか。さまざまな背景と専門を持ち、学部での教員養成に携わっている当事者同士、現実の中での互いの取り組みを聴き合い、語り合う場を創っていききたいと思います。

前回同様今回も、少人数で多様なメンバーが大学を超えて教員養成の取り組みを聴き合うことを中心に据えたいと思います。それぞれの取り組み、そこでの工夫、あるいは課題や悩みも含めて共有し学び合いながら、これからの学部における教員養成への夢を、当事者としてふくらませていくことができればと思います。

互いの現実とそこでの取り組みを聴き合うことを通して、また夢を語ることを通して、さまざまなキーワードがセッションの中で浮かび上がってくる。それをさらに次回のセッションにつないでいきたいと思います。

B2 (b) 学部学生のクロスセッション 授業/活動 一語ろう・聴こう・出会い直そうー

「教職への夢が語れる教員養成」へと展開していくためには、どんな課題と向き合い、どのように解決していけばよいのでしょうか。前回立ち上がった【Zone B2】では、全国から集ってきた大学教員たちが、それぞれの大学で実践している授業や活動をもとにセッションを行い、この「問い」と向き合いました。互いの取り組みにおける課題を語る中で、そこから浮かび上がってくる Key word によって、これからの教員養成に対する夢が語り合えると期待していたのです。

確かに、Key word はたくさん表出してきました。しかし、「夢が語り合える」ほどのものであったのかという疑問が残りました。それは、Key word のほとんどが、教員の立場で見出してきた課題から立ち上がってきたものだったからなのかもしれません。そして、改革を押し進めるためには、教員養成における学びの主体者である学生たちの課題を踏まえたものでなくては、「夢が語り合える」ような Key word にはならないのではないか、といった新たな「問い」が生まれてきました。

【Zone B2b】は、このような「問い」を受け、新たに立ち上がった学生たちのクロスセッションの場です。まずは、「自分たちは、あるいは他大学で学ぶ学生たちは、どのような授業や活動を通して、何を学んでいるのだろう」と言ったところから、語り合い、聴き合ってほしいと思います。互いの取り組みを聞き合う中で、授業や活動の中に潜在していた意味ある課題と出会い直すことができるかもしれません。学生と教員と一緒に夢を語ることでできる Key word も、そこからなら見つかるのではないのでしょうか。学生の皆さんの参加をお待ちしています。

Orientation	13:00-13:10	
Session I	13:10-14:10	ポスターセッション
Session II・III	14:30-14:45	オリエンテーション
	14:45-16:40	教員養成を考えるクロスセッション/学部学生のクロスセッション 福井大学、静岡大学、信州大学、長崎大学、中部大学、江戸川大学、 四国大学、文京学院大学、福井工業大学……
	16:45-17:20	振り返り
	14:45-16:00	教員養成を考えるクロスセッション/学部学生のクロスセッション
	17:20-17:40	閉会

Zone C コミュニティ

何がコミュニティの持続的な発展を支えているのか

急進的な改革はないが、長年にわたって絶えず発展を続けている取り組みがある。一方で、当初は理想的に見えても、短時間で頓挫してしまう取り組みもある。この違いはどこから生まれてくるのだろうか？

これまで Zone C では、コミュニティの持続可能性に関わる課題を探究し続けてきた。そして、学校以外の場でも人の学びを支える多様なメンバーと協働探究を続けてきた。メンバーの多くは、地域社会の学びの場をコーディネートする役割を担っているが、それぞれの取り組みを持続可能なものに行っているのは、力量あるコーディネーターなのだろうか？

学校内外問わず、コーディネーター役を担っているスタッフが永久に居続けることはない。定期的にスタッフが入れ替わるのが常である。そうすると、特定の力量ある個人が取り組みを支え続けるという形には必ず限界がある。スタッフが入れ替わっても発展が持続する仕掛けが組織に備わっていなければならない。それは何なのか？

Zone C では、community という言葉に地域社会や共同体といった訳はあてず、コミュニティという語が使われてきた。それはおそらく、特定の場所や集団ではなく、そこにいる人々によって営まれているコミュニケーションの構造に目を向けているからだろう。今回はコーディネーター個人の力量ではなく、それぞれの取り組みの発展を持続可能なものに行っている仕掛けやコミュニケーション構造に目を向け、これからスタッフが入れ替わっても発展を持続させるためにどのような取り組みが求められるか、多様なメンバーで考えていきたい。

Orientation 13:00-13:10

Session I 13:10-14:10 ポスターセッション

福井市中央公民館、福井市足羽公民館、福井市清水東公民館、福井市越廼公民館、福井市殿下公民館、福井市木田公民館、福井市円山公民館、福井市一乗公民館、越前市坂口公民館、越前市花筐公民館、越前市南中山公民館、越前市服間公民館、ふくい市民国際交流協会、福井大学探求ネットワーク 等

Session II 14:20-15:50 シンポジウム

〈シンポジスト〉福井の公民館主事

福井大学探求ネットワーク

〈コーディネーター〉 福井大学教職大学院 富永 良史 、 宮下 哲

Session III 16:00-17:40 フォーラム

Session I, II を受け、5~6 名の小グループとなり実践の交流を行います

参加者: 福井市の公民館主事、越前市の公民館主事、福井市生涯学習室、福井大学探求ネットワーク、地域の課題に取り組んでいる NPO、学校教育関係者、企業関係者、福祉関係者、日本語教育関係者、早稲田大学、明治大学、東京学芸大学、玉川大学 等

Zone D 授業研究

「子どもと教師の学びを支えるために授業研究をいかに組織するのか」

教師が専門職として生涯にわたって学び続け、成長し続け、新しい時代の授業づくりへの意欲を高め維持していくために、そして、未来を築いていく子どもたちの学びと成長を支えるために、日本独自の学校文化・教師文化である授業研究に大きな期待が寄せられています。しかし、ただ授業研究を実施すれば教師の指導力や授業づくりへの意欲が向上するわけでもなく、また、子どもたちの学力や生活力が向上するわけでもありません。何のために授業研究を実施するのか、いかなる授業研究を実施するのか、どのように授業研究を実施するのか、私たちはこれらの問いを常にもちながら、確かな戦略をもって授業研究を実施することが必要になります。

Zone Dでは引き続き、「専門職の資本」※という考え方にに基づき授業研究についての検討を進めながら、今回は次期学習指導要領改訂に向けて「子どもと教師の学びを支えるために授業研究をいかに組織するのか」というテーマで各Sessionを進めていきます。未来を築いていく子どもたちの学びと成長を支えている実践者や研究者の方々、「専門職の資本」を磨きはじめた若い実践者の方々にご参会いただければと思います。

※「専門職の資本」は人的資本、社会関係資本、意思決定資本の3つからなり、これらは、教師が専門職として生涯にわたって学び続け、成長し続けていくために投資できる（磨いていける）ものです。Zone Dでは、授業研究の力を「専門職の資本」へ投資するという観点から、参会者の皆様と一緒に考えていきたいと思えます。

Session 0 オリエンテーション 13:00-13:10

Session I ポスターセッション 13:10-14:10

Session II シンポジウム 14:20-15:50

「次期学習指導要領改訂に向けて授業研究をいかに組織するのか」

シンポジスト 鼎談

福井大学教育学部附属中学校・教諭 森田 史生 氏

埼玉県立新座高等学校・教諭 金子 奨 氏

玉川大学教育学部・教授 石井 恭子 氏

Session III フォーラム 16:00-17:40

「子どもと教師の学びを支える授業研究の実践」

A. 学校における授業研究の多様性から学び合う

A-1 信州大学附属長野小学校の実践 福井大学教育学部附属小学校の実践

A-2 福岡教育大学附属福岡中学校の実践 越前市武生第一中学校の実践

B. 高校における授業研究の発展

大東学園高等学校（依頼中） 福井県立敦賀工業高校（検討中）

C. 授業研究の国際展開 Globalization of Lesson Study

実践し 省察する コミュニティ

Round Tables:
Spring Sessions 2017
for Reflective Practice
and Organizational Learning
in University of Fukui

For Communities of Practice and Reflection, since 2001

2/19 (sun)
8:20-14:00

Session IV Round Table Cross Sessions

実践の長い道行きを語り 展開を支える営みを聞き取る

①はじめに 8:30-8:40 ②自己紹介 8:40-9:00 ③報告Ⅰ 9:00-10:40 ④報告Ⅱ 10:40-11:40 ⑤報告Ⅲ 12:20-14:00

地域や職場で自分たちの実践をじっくり跡づけ、その省察をふまえて実践を編み直していく。地域・職場を大人同士が実践を通して学び合う協働体（コミュニティ）に変えていく。その中で一人一人が、省察的で主体的な実践者としての力を培っていく。そうした地道な取り組みが少しずつ蓄積されてきています。

試行錯誤を重ねながら大切に進められてきているそうした取り組みを、より広く伝え合い、じっくり展開を聞き取り、学び合う場を作りたいと思います。

小グループで実践の展開を聴き合います。

実践記録を土台に実践の歩みをじっくり語っていきたいと思います。心に残っている場面。言葉、表情、行為。その時々感じていたこと。ふりかえる中で見えてきたつながり。話し合いと記録づくりの中ではじめて気づいたこと。いま改めて跡づけ直して考えていること。

語られる展開に耳を傾け、活動の場面を共有し成長のプロセスを探っていきたいと思います。実践の過程をじっくり語り・聞きあう場、実践を共有して協働探究できる関係がより広く培われていくことが、その後の実践への問いの深まりを支える拠り所になると思います。

- 申込は上記ホームページから申込書式をダウンロードし、必要事項をご記入の上、メールで送っていただく形でいきます。受付期間は 12 月 5 日から 2 月 17 日を予定しています。
- 2/19 の sessionⅣ の実践報告者を募集しています。申し込みの際にお知らせ下さい。
2/19 の sessionⅣ の参加についてのお願い＝午前午後全日程（8:20-14:00）の参加をお願いします。
- ラウンドテーブルでは少人数で互いの実践の長い展開を聴き合い、考え合うことを目的としています。そのため 8:20-14:00 の全日程を 6 人程度の固定メンバーの小グループでの協働探究として進めます。原則として 8:20-14:00 の全日程に参加できるメンバーで進めますので、よろしくお願いいたします。

プログラムの変更等があります。

最新の情報を福井大学教職大学院ホームページ <http://www.fu-edu.net/> をご確認ください。

実践研究福井ラウンドテーブル 2017 Spring Sessions 平成 28 年 2 月 18 日(土)

Students' Poster Session

「子どもたちが語る『私たちの学校・学び・未来のイノベーション』」のご案内

実践研究福井ラウンドテーブル 2017 Spring Sessions、2月18日（土）Students' Poster Session 「子どもたちが語る『私たちの学校・学び・未来のイノベーション』」のご案内です。これから、21世紀半ばの未来を創っていく小学生・中学生・高校生が今、この時の教育の中で何を学び、いかに学び、そして未来を切り拓いていくための力と心をいかに培っているのかを、「私たちの学校・学び・未来」というテーマで子どもたち自身の言葉で表現していただきます。

- 1 日時 平成 29 年 2 月 18 日（土）
10：20 - 10：50 受付・ポスター発表準備
11：00 - 12：20 **Students' Poster Session**
12：30 - 13：10 ランチ・休憩
13：10 - 14：10 **学び de 交流 タイム**
小学生「きずなをつくる」
中学生「夢 語ろう会」
高校生「イノベーション 語ろう会」
- 2 会場 福井大学文京キャンパス 総合教育棟 I 13 階 大会議室
- 3 参加費 無料
※ 自家用車での入構・駐車も無料です。
18 日（土）午前中は大学正門ゲートに係員がおりますので直接お進みください。
午後は守衛所での手続きが必要な時間帯がございます。
- 4 準備物 発表物、筆記用具、お弁当 ※発表用ポスターは A0 版を掲示可能です
- 5 発表申込方法
福井大学教職大学院准教授・木村優 E-mail: sputniksign@gmail.com 宛に、ポスター発表申込の旨を 2 月 11 日（土）までにお知らせください。申込書をメール返送いたします。
- 6 その他・備考
児童生徒さんの来場や送迎に関しては、学校の先生方もしくは保護者の方々に引率をお願いいたします。当日は、会場：大会議室の入口スペースを待合室として利用可能です。昼食（お弁当等）は児童生徒各自でご持参願います。

実践研究福井ラウンドテーブル 2017 Spring Sessions 平成 29 年 2 月 18 日(土)**保幼小教育フォーラム「子どもの世界を広げ、つなぐために」**

幼稚園・保育所・認定こども園は、子どもが家庭から社会へと初めの一步を踏み出す場であり、さまざまな人や物に触れて、大きく成長していきます。そしてその育ちが小学校へとつながっていきます。このセッションは、幼児期から学童期の、子どもの世界が広がっていく始まりの時期に焦点を当て、園や学校でどのように子どもたちの育ちを支えられるのか、考えたいと思います。具体的には、まず保育園・幼稚園・小学校から、それぞれの取組について1つずつ話題提供いただきます。若い保育者も多い幼児教育の現場で、子どもの育ちを支える力をいかにして高めたいのか。園内での研究保育や事例検討をどのように進めたら保育者の力量につながるのか。幼児期の子どもの育ちを小学校の授業の中で生かし、伸ばしていくにはどうしたらいいのか。3つの報告を踏まえて、小グループでお互いの取組を交流しあい、一緒に考えていけたらと思います。幼児教育や小学校教育に関心を持つ多くの方のご参加をお待ちしております。

話題提供: 福井県内保育所・滋賀県内幼稚園・福井県内小学校(予定)

コーディネーター: 岸野麻衣(福井大学)

1 日時 平成 29 年 2 月 18 日(土)11:00~12:20

2 会場 福井大学文京キャンパス 総合教育棟V(教育系 1号館)

6階コラボレーションホール

3 参加費 無料

※ 自家用車での入構・駐車も無料です。

18日(土)午前中は大学正門ゲートに係員がおりますので直接お進みください。
午後は守衛所での手続きが必要な時間帯がございます。

4 申込方法 福井大学教職大学院ホームページ(<http://www.fu-edu.net/>)より、

申込フォームをダウンロードの上、申込方法に従って申し込みください。

5 その他 当日午後と翌日には、実践研究福井ラウンドテーブルが開催されます。当日午後は、学校・教師教育・コミュニティ・授業研究といった様々な領域にわたるポスター・シンポジウム・フォーラムが開催され、翌日は小グループでの実践交流が行われます。これらのセッションにも是非ご参加ください。詳細は、福井大学教職大学院ホームページ(<http://www.fu-edu.net/>)をご確認ください。

実践研究福井ラウンドテーブル 2017 Spring Sessions 平成 29 年 2 月 18 日(土)

省察的実践学会 発足にあたって

個々のコミュニティ・分野・領域を超え、実践の知を通わせ、結んでいく。そのための新しい実践研究の交流の場を拓く。そうした新しいコミュニケーションの場を目指して、2016年6月、〈省察的実践学会〉の呼びかけをはじめました。以来、多くの方に賛同いただき、さまざまなコミュニティ・分野・領域から発起人・会員が集まりつつあります。正式な発足に向けて、学会の趣旨を共有し、学会の根幹をなす雑誌「省察的実践研究」の発行に向けた進め方について確認するセッションを持ちたいと思います。

- 1 日時 平成 29 年 2 月 18 日 (土) 18 : 00~18 : 40
- 2 会場 福井大学文京キャンパス 総合教育棟V (教育系 1 号館)
6階 コラボレーションホール
- 3 参加費 無料
※ 自家用車での入構・駐車も無料です。
18日(土)午前中は大学正門ゲートに係員がおりますので直接お進みください。午後は守衛所での手続きが必要な時間帯がございます。
- 5 申込方法 福井大学教職大学院ホームページ(<http://www.fu-edu.net/>)より、申込フォームをダウンロードの上、申込方法に従って申し込みください。当日および翌日には、実践研究福井ラウンドテーブルが開催されます。これらのセッションにも是非ご参加ください。詳細は、福井大学教職大学院ホームページ(<http://www.fu-edu.net/>)をご確認ください。

Schedule

- 2/17 Fri- 2/19 Sun** 実践し省察するコミュニティ 実践研究福井ラウンドテーブル
- 3/4 Sat** 第3回入学試験
- 3/23 Thu** インターンシップ説明会/学位記伝達式・再出発に向けたカンファレンス
- 4/8 Sat** 教職大学院開講式

【編集後記】冬期集中講座、そして長期実践報告書の執筆を経て、いよいよ長期実践報告会を迎えることとなりました。これまでの歩み(過去)を語る中で、また新たな展望(未来)がひらかれていくことと思います。長期実践報告会の後には、ラウンドテーブルの開催も近づいております。今回もまた新たな展開が多生まれており、新たな出会いの中で、また新しい過去と未来が広がっていくことが期待されます。(笹原)

教職大学院 Newsletter **No.93**

2017.2.5 内報版発行
2017.2.28 公開版発行

編集・発行・印刷
福井大学大学院教育学研究科教職開発専攻
教職大学院 Newsletter 編集委員会
〒910-8507 福井市文京 3-9-1
dpdtfukui@yahoo.co.jp